

テレビ目線

七月末の参議院議員選挙で自民党が大敗した。年金問題とか相次ぐ大臣の不祥事とか、理由はさまざまだろうが、要するに安倍晋三首相に人氣がないからだ。それについても多くが語られているが、私はテレビに登場するあの目になる。質問した記者に向かって答えなくて、カメラレンズに語りかける「テレビ目線」である。

首相としては、とかく自分に批判的な新聞・マスコミなんかに答える必要はない、聞いてもらいたいの「国民」になんだ、記者の偏向した原稿に頼るよりは無機質な映像機器

南
無

善
財

すがわらのぶお
菅原伸郎

東京医療保健大学教授

を通しての方が真意は伝わる、とでも考えているのだろう。

そういえば、祖父の岸信介首相はデモ隊の「安保反対」という叫びを聞きながら「野球場はファンでいっぱいだ。声なき声は支持してくれている」と開き直った。その実弟の佐藤栄作首相も、官邸の会見室から記者を総退場させた実績がある。

そんな遺伝体質についてはともかく、現首相は勘違いしている。その「国民」とはどこにいるのか、とい

うことだ。首相官邸を出て、永田町の歩道を散策すれば、信濃町の街角に立てば、そこで「国民」と出会えるのか。自民党员や創価学会員を動員した演説会場で「民意」が聴けるのか……。

語りかける具体的な相手が見えないから、あの目線は虚ろなのだろう。本人は「国民」に話しているつもりらしいが、実は虚空に向かって独り言を発しているだけだ。それよりは質問した記者本人に向かって、具体的に答えた方が親しみやすくなるのに。学芸部記者だった私としては、決して「政治部記者が国民の代表だ」などと思わないが、少なくとも多数の関心を代弁していることには違いないのである。

安倍さんは「美しい国、日本」とかいうスローガンも掲げている。しかし、私にとつては「国」というものも存在しない。先輩のデスクから「安易に『国は……』『県は……』といった原稿を書くな」と教わってきたからである。

というのも、新聞記者は「国」に取材することができない。霞ヶ関で話を聞いても、それは〇〇省〇〇課の課長補佐の話だ。たまに「国はこう考えている」などと発言する誇大妄想的な高級官僚もいるが、特定部署を一時的に担当する自分の思いを権威つけてしゃべっているだけだろう。内閣総理大臣であっても「国」自体ではなく、立法府や司法府と同格の、行政機関の代表にすぎない。

もちろん、戦後の象徴天皇が「国」でないことは当然である。

地域や経済を表す言葉として「日本」という概念はたしかにある。日常生活の安定を保つには、当面、それなりの入国制限も必要だろう。しかし、それは戦前のような、忠誠を尽くす対象としての「国家」ではない。EU誕生などを見れば、歴史の流れが垣根を取り払う方向にあることは間違いないだろう。

新聞社を離れてみて、実はこう考えた考えこそが仏教の教えに沿って

るように思えてきた。たとえば、あの《仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し……》という「臨濟録」の言葉を思い出してみよう。神仏だろうと、開祖や名誉会長だろうと、父母であろうと、執着してはならない、という警告である。仰々しい「国家」とか「国民」とか「市民」とかいった固定観念に縛られてはいけないわけだ。

右であれ左であれ、そうした言葉を振りかざす「魔物」が出てきたら、眉につばをつけて足下をよく見るとにしよう。それこそが、皇太子でありながら釈迦国を捨てたシツダルタや、王位を捨てて法蔵菩薩から阿弥陀仏にもなった方が示された、勇氣ある生き方ではなからうか。

